

43 掛川地方における遠州の七不思議

筆 者 大石 悟志

「遠州七不思議」とは、遠州地方に伝わる七つの不思議な話です。諸説があり実際には七つ以上の不思議が紹介されている。地域によっては話が違っていたり、一定のものではないようです。晴明塚、小夜の中山・夜泣き石、無間の鐘、霧吹き井戸、桜が池の大蛇（御櫃納め）、池の平の幻の池、子生まれ石、三度栗、京丸牡丹、波小僧、片葉の葦、天狗の火、能満寺の蘇鉄、柳井戸、などが挙げられている。

掛川地域の七不思議

晴明塚（掛川市大淵）

その昔、この地（遠州地方）は、しばしば津波の害に襲われた。今から千年程前の平安時代中期に（985年頃）、京で名高い天文道や陰陽師を納めた「安倍晴明」が、諸国を巡る途中で旧大須賀町大淵・藤塚の地を訪れ、庄屋「源左衛門」宅に逗留し、「三日以内にこの村に津波が押し寄せ人家が流され、多くの人の命が失われる」といった。村の人達は驚いて、清明に津波の被害から救ってくれるように懇願した。晴明が、あずき色の小石を積み上げて熱心に津波防止の祈祷を行った。そして数日後、大津波が起こり多くの人家が流されたが、この村だけはなぜか津波の被害がなかった。自然の猛威を鎮めた晴明の偉業をたたえて感謝した村人は、護摩を焚き祈祷したこの塚を祀り、「晴明塚」と呼ぶようになったと言われている。

その祈祷の甲斐あってかこの地では以後津波の害がなくなったと言われる。なぜか、今でも「掛川市防災ガイドブック」を見ても、この周辺は 浸水区域から外れている。現在では津波の他に疫病も防いでくれると伝わる。特に天然痘の場合は、この塚で祈願したのち、小豆色の石を持ち帰り祀れば罹病しないと信じられていた。疫病除けの願をかけて小豆色の石を塚から一つもらって、もしも願がかなったなら、お礼参りの時は、二つの赤い石を塚に戻すとよいという。すると、返した石がどんな色の石でも一夜のうちに小豆色に変わる。と言い伝えられ、疫病の流行期には遠近から多数の参詣者があったようです。

また八木美穂著「郷里雑記」によれば、当時は石倉の神と呼び、旱魃の際、雨乞いをする事が記されており、この塚は雨乞いの塚でもあったようだ。



この清明塚はサンサンファームを西へ500メートル、国道150号線を南に50メートル入った防風林の中に存在し、国道沿いに小さな立て札が建てられている。かつての大須賀町の町指定文化財であり、現在は掛川市の文化財となっている。この清明塚の北方（150号線を挟んだ北300メートル程）に「すすぎ井戸」言われる跡地があり、清明が祈祷する前にこの井戸で身を清め、また隣村（藤塚村）に呪文（起請文）をしたためた「硯井戸」の跡地（石碑が立っている）がある。この井戸の水で墨をすり、字を習うと上手になるといわれた。当地域は、東海地震がいつ来てもおかしくないと言われて、すでに50年以上たっている。このまま地震や津波がないのが最も良いのかもしれないが、清明塚があるおかげで地震や津波の被害が少なくて済むようなことであれば、「安倍清明」さんの、「清明塚」のおかげです。近くに浜岡原子力発電所もあるのでなおさらのことです。また、昔から、厄病除けの効果がある・ご利益があるという「清明塚」ですので、今では疱瘡（天然痘）はなくなりましたが、そのかわりにコロナという疫病が流行している昨今です。私も「今年こそコロナが終息するように」と祈願してきましたが、昔よりもあずき色以外の石が少なからず多くなっているように感じたのは、コロナ除け祈願の人達がお見えになっている為であるかもしれません？。

遠州七不思議のひとつで、平安時代の陰陽師「安倍清明」にまつわる塚です。皆さんも是非一度、「清明塚」に行ってみて下さい。

夜泣き石（掛川市佐夜鹿、小夜の中山）

その昔、小夜の中山に住むお石という女が、菊川の里に働きに行つての帰り中山の丸石の松の根元でお腹が痛くなり、苦しんでいる所へ、轟業右衛門と云う者が通りかかり介抱していたが、お石が金を持っていることを知り殺して金を奪い去った。その時お石は懐妊していたので傷口より子どもが生まれ、お石の魂魄がそばにあった丸石にのりうつり夜毎に泣いた。里人はおそれ、誰と言うとはなく、その石を「夜泣き石」と言った。

傷口から生まれた子どもは音八と名付けられ、久延寺の和尚に飴で育てられ立派な若者となり大和の国の刃研師の弟子となった。

そこへ轟業右衛門が刃研にきたおり刃こぼれがあるので聞いたところ、「去る十数年前小夜の中山の丸石の附近で妊婦を切り捨てた時に石に当たったのだ」と言ったので、母の仇とわかり名乗りをあげ、恨みをはらしたということである。その後弘法大師がこの話を聞き、お石に同情し石に仏号をきざみ、立ち去ったと言う。

文政元年、滝沢馬琴の「石言遺響」より 「久延寺の説明板」



久延寺は奈良時代に行基によって開かれたといわれる名刹、この寺は徳川家康にゆかりのあるお寺で、当時の掛川城主の山内一豊が、徳川家康をもてなした寺としても有名です。境内は掛川市の指定文化財に指定されており家康お手植えの松もある。

「無間の鐘（掛川市東山、栗ヶ岳）」

小夜の中山の東、菊川の村に いる仏の道を修行する山伏がふ と思う事があり、「仏様へのお願いに、栗ヶ嶽の頂上の観音寺に、釣鐘を寄付しよう」と考え、多くの人の寄付を集め大きな釣鐘を作って、観音寺の釣鐘堂に吊るした。鐘の音は広く遠州の国々に響くものであり、釣鐘は大評判になり噂が独り歩きし始め「あの鐘を撞くと大金持ちになれるが、死んだあとは地獄に落ちる」という話になっていった。欲の深い人たちが我先にと、今が良ければそれでいいとばかりに鐘を撞きにやってきて険しい道から足を滑らせ落ちるものが続出し、それを見かねた和尚様が「そんな考えで鐘を突きに来るのなら、無い方がいい」と考え栗ヶ岳の頂上にある古い井戸の中に投げ入れ埋めてしまった。それ以来、無間山観音寺の無間の字をとって「無限地獄に落ちる」意味の「無間の井戸」と言われるようになったという事です。



霧吹き井戸（掛川市、掛川城）

掛川城に残る伝説の一つ。西から徳川家康、東から武田信玄に攻められた駿河の今川氏真は、掛川城に逃げ込んだ。しかし今川氏真の立ちこもる掛川城を落とそうとする家康からの攻撃を受けた（1569年）。城兵は、勇ましく城門を開いて戦ったが、敵は多勢・城兵は次第に攻め立てられ、ついに城中に追い詰められてしまった。「残念だ、これまでだ・・・」と、落城間近となった時である。不意に天守閣の前の井戸から、もうもうとした白霧が吹きだして、見る間に城を包んでしまった。徳川軍は攻めることもできず、逆襲の恐れもありとして軍を撤退した。井戸から立ち込めた霧が城を覆い隠し、徳川軍の攻撃から城を護ったと言われている。それ以来この井戸を「霧吹き井戸」と称えるようになった。



その他の地域（遠州）の七不思議

桜ヶ池の大蛇・御櫃納め（御前崎市佐倉）

桜ヶ池（さくらがいけ）は、御前崎市佐倉にある池。桜の名所で、1954年（昭和29年）に県に名勝として指定されている。池のほとりには竜神を祀る池宮神社が鎮座している。

竜神伝説

平安末期の1169年6月13日、比叡山の皇円阿闍利が、56億7000万年後に現れるという弥勒菩薩に教えを乞うと言ひ残し、自ら桜ヶ池の底に沈んで竜神（大蛇）となった。

以降、秋の彼岸の中日には赤飯を詰めたお櫃を池に沈めて竜神に供える奇祭「お櫃納め」が行われている。数日後には空になったお櫃が浮いてくると言われ、遠州七不思議のひとつになっている。

桜ヶ池に沈めたお櫃が、同じく竜神伝説の残る長野県の諏訪湖に浮いたことがあるとされ、諏訪湖と地底でつながっているという言い伝えがある。

これに関連して、静岡県浜松市の池の平では7年周期で池（幻の池）が湧くという不可思議な現象が起こるが、これは桜ヶ池の竜神が諏訪湖に赴く際に休息するためであるという言い伝えがある。



池の平（浜松市天竜区水窪町池の平・幻の池）

標高880m亀の甲山の中腹に「池の平」と呼ばれる窪地がある。この窪地は、普段は一滴の水もない杉木立の平坦な場所であるが、7年に一度こつ然と水が湧き出て満々と水を湛えた周囲が約200m、水深が2～3mもの池ができるという不可思議な現象の起こる場所です。

この幻の池は「池の平」と呼ばれています。1569年（永禄12年）、高根城が攻撃を受けた際、城主民部少輔貞益の後室だったおかわ御前が、子供を連れ池の平に逃げ込んだが、泣き出したため追っ手に見つかり、殺害されてしまった。以降、おかわ御前の無念の涙が溢れて水が湧き出すようになったとも伝わります。

「池の平」に突然、池が出来るのは御前崎市佐倉にある「桜ヶ池」に棲んでいると言われる「竜神」が、信州の諏訪湖に行く途中に休息ためだからとか、諏訪明神が休息する場所だからと伝えられている。

そして「池の平」に池が出来る年は、なぜか日照り続きの夏に限られるといわれている。



のである。昔から、この池の水は胃腸の病気の妙薬だといわれ、水が湧いて池が出来る
と、この水を汲みに村中の人たちがお祭り騒ぎのように、賑やかに集まってきたという。
そして1週間くらい経つと自然に水は引いて、池は跡形もなくなってしまい、せつかく村
人たちが汲んできた水も同時に消えていってしまうと伝えられている。どうして満々と水
を湛えた大きな池が、突然出現するのだろうか。

標高からみて地下水が湧きあがるとは考えにくい。水窪の地層は古く硬く水が浸み込み
にくい所が多い。降った雨はすぐに斜面を流れ落ちていってしまう。草の保水力が高ま
り、夏の雨水がジワジワと集まるだとか、地下に水みちがあって水が溜って池が出来るな
どと言われているが、実際のところ出現の謎はわかっていない。

子生まれ石（牧之原市西萩間、大興寺）

大興寺（だいこうじ）は、牧之原市西萩間（にし
はぎま）にある曹洞宗の寺院。山号は龍門山。室町
時代に、總持寺の第8代大徹宗令によって開山さ
れたとされる。

大徹和尚は、自分の死後に、裏山の岩から、まゆ
形の石が生まれるから、これを自分の身代わりとし
て大切にせよと言いついて息を引き取り、果たして
その通りになったという。人々はその石を和尚の墓
石として、大事に扱った。その後、住職の代が代わ
るごとに、裏山から新しい石が生まれるという。寺
の住職は代々長寿であったことから「長寿の石」とし
て、子供が生まれるように現れることから「子授
けの石」「安産の石」として、人々の信仰を集めて
います。



三度栗（菊川市三沢）

弘法大師空海が諸国巡礼の折、三沢村（旧菊川町中内田の応声教院）を通りかかったと
ころ、村の子供たちがおいしそうに栗の実を食べていた。これを見た空海が自分にもひと
つわけてくれないかと頼んだところ、子供たちは快く栗の実を差し出した。これに喜んだ
空海は、「これからは、この村に年に三度栗を成らすことにしよう」と言い、この地をあ
とにした。以来三沢の栗は、年に3度実をつけると言われている。応声教院の本堂前に植
えられていた三度栗は、枯れてしまったが、境内西側の林に同じ種類の栗がある。

また、周智郡森町園田に伝わる三度栗伝説は、徳川家康にまつわるものもある。武田軍との戦いに敗れ敗走する家康は、園田の地までたどりつき、一軒の農家の庭先に座り込んでいた。何か食べるものはないかと、この家の老婆に尋ねると、老婆は拾ってきたばかりの生栗を差し出した。家康はこの栗を幾つか食べ、残った実一つを庭先の畑に埋めて、自分の食べた分だけ実るよう祈り去っていった。やがてそこに芽を出した栗の木は、年に3度実をつけるようになったと言われている。



さらに、静岡県袋井市三川にも徳川家康にまつわる三度栗伝説が伝わる。武田軍との戦いに敗れ逃げ込んだ家康が、食事をするために弁当を開いたところ箸がなく、家来が箸にするため近くの栗の小枝を折って渡した。食事後、家康がこの小枝を地面に突き刺し、もし天下を取ったら1年に3度実を結ぶように言ったところ、やがてこの栗の木に1年に3度実がなるようになったという。

京丸牡丹（浜松市天竜区春野町）

昔、春野町気田から数十キロの山奥に京丸という村があり、そこに一人の若い旅人が迷い込んできた。彼は長い山道に疲れ果て、更に空腹だったため、まるで病人のようであった。旅人が村の村長の家を訪ねると、彼の事情を聞いた村長は親切にいたり、食と宿を与えた。また、村長には若く美しい娘がおり、彼女もまた旅人を優しくいた



わった。幾日か経つと、旅人は元のように元気になったが、旅人はこの村から出ようとはせず、村人と一緒に炭焼きや農耕の手伝いをしていた。そして、彼はいつの間にか村長の娘と恋仲になっていた。旅人と娘が恋仲になっているのを村長は、困っていた。娘の恋を成就させたいと願う一方、村には他村の者を村人にするか他村の者と結婚することを禁止する厳しい掟があった。村長は旅人に村の掟を話し、村から出て行って欲しいと頼むと、旅人は承知したが、次の日の朝には若い二人の姿が村から消えていた。それから数ヵ月後の夕暮れ、村長の家の裏に村を出たはずの若い二人がみすばらしい姿で立っていた。二人はこの数ヶ月、いろいろな地を回ったが、どこにも安住の地を求めることができず、村に戻ってきてしまったのである。しかし、村長は掟だからと言い、二人は再び家を出て行った。二人はその足で村の前の気田川に身を投げ、死んでしまった。その後、命日になると行き場のない2人の魂が大きな牡丹となって気田川のふちを彩っている。

波小僧（遠州灘）

奈良時代の僧・行基が年老いた母の快癒を祈願して2体の藁人形を作り、田植えをさせた。行基は田植えを終えた藁人形に読経を聞かせた後、風雨の災害が起きる時は必ず事前に人々へ知らせるよう言い聞かせて久留女木川（都田川の旧称）へ流した。藁人形のうち1体は海へ流れ着き、漁師が仕掛けておいた網に引っかかる。海から引き上げられた波小僧は漁師に命乞いをし、「助けてくれれば波の音で天気を知らせる」と約束する。漁師は波小僧を網から解放し、波小僧は海の向こうへ姿を消した。こうして遠州灘の波の音は「雷三里、波千里」と呼ばれる地鳴りに似た独特の響きを持つようになり、漁師たちは波の響きが南東から聞こえれば雨、逆に南西から聞こえれば晴れと知ることが出来るようになった。



片葉の葦（菊川市三沢）

「片葉の葦」は、葦の葉が茎の片側にしか伸びません。平安時代末期から鎌倉時代初期の武将 熊谷次郎直実が、応声教院を参拝するため馬を松の木へ繋いでおいたところ、馬が葦の葉の片方だけを全部食べたからと伝わります。

また、一説には、この熊谷直実が法然ゆかりの当院を訪れた時、法然上人から授けられた「袈裟」を松の枝（袈裟掛けの松）に掛け、下の小池で手を清めました。この時、袈裟に触れた葦が、念仏の功德を感じて片葉が伸びなくなったと言われています。また、一説には、繋いでおいた直実の馬が片側の葉をのみ食べたから、片葉の葦になったとも言われている。



浜松市南区頭陀寺町にも伝承地がある。豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といった少年のころ、現在の頭陀寺町の松下嘉平次という武士のところへ下男として働いていた。藤吉郎の仕事は毎日草を刈って畑を耕すことであったが、草を刈りに家の東にある雑草と葦に囲まれた小池のほとりへと出かけ、砥いだ鎌の切れ味を試すため、葦の片側の葉のみを切り落

とした。片方の葉のみ切り落とされた葦は、片葉の葦となってしまった。今でもこの場所は『鎌研ぎ池』として残っている。

この他、片端の葦については、袋井市の妙日寺や湖西市白須賀の八幡社等多数みられる。

天狗の火（御前崎市）

天狗火（てんぐび）は、神奈川県、山梨県、静岡県、愛知県に伝わる怪火。

主に水辺に現れる赤みを帯びた怪火。その名が示すように、天狗が超能力によってもたらす怪異現象のひとつとされ、神奈川県や山梨県では川天狗の仕業とされる。夜間に山から川へ降りて来て、川魚を捕まえて帰るとも、山の森の中を飛び回るともいう。

人がこの火に遭遇すると、必ず病気になってしまうといわれている。そのため土地の者はこの火を恐れており、出遭ってしまったときは、即座に地面にひれ伏して天狗火を目にしないようにするか、もしくは頭の上に草履や草鞋を乗せることでこの怪異を避けられるという。

遠州（静岡県西部）に現れる天狗火は、提灯ほどの大きさの火となって山から現れ、数百個にも分裂して宙を舞うと言われ、天狗の漁撈（てんぐのぎょう）とも呼ばれている。



愛知県豊明市には上記のように人に害をなす伝承と異なり、天狗火が人を助けたという民話がある。昔、尾張国（現・同県）東部のある村で、日照り続きで田の水が枯れそうなとき、川から田へ水を引くための水口を夜中にこっそり開け、自分の田だけ水を得る者がよくいた。村人たちが見回りを始めたところ、ある晩から炎の中に天狗の顔の浮かんだ天狗火が現れ、水口を明るく照らして様子をよく見せてくれるようになった。水口を開けようとする者もこの火を見ると、良心が咎めるのか、明るく照らされては悪事はできないと思っただけ、水口を開けるのを思い留まるようになり、水争いは次第になくなったという。また同県春日井市の民話では、ある村人が山中で雷雨に遭い、身動きできずに木の下で震え上がっていたところ、どこからか天狗火が現れ、おかげで暖をとることができた上、道に迷うことなく帰ることができたという。しかしこの村では天狗火が見える夜に外に出ると、その者を山へ連れ去ってしまうという伝承もあり、ある向こう見ずな男が「連れて行けるものならやってみろ」とばかりに天狗火に立ち向かったところ、黒くて大きな何かがその男を捕まえ、山の彼方へ飛び去っていったという

その昔、文吉という若者がいました。漁師である千吉の家に遊びに行き、時が過ぎるのも忘れて過ごしました。帰る文吉に、千吉は朝取れたばかりの魚を土産に持たせました。真っ暗な中、文吉は魚を抱えて海沿いを歩きましたが、突然、はるか向こうの山の方から、なにやら青い光が飛んできました。それを見た文吉は天狗だと気づき、急いで近くの小舟の影に身を隠し、千吉からもらった魚を投げました。火が見えなくなっておそろおそろ出てみると、砂の上には両目をえぐられた魚が散らばっていました。魚の目は天狗の好物。天狗が残した魚を食べた者は幸せになれるともいわれています。

遠州灘では火の球が現れる不思議な現象を「天狗の火」と呼び、同様の伝説が、静岡県各地に残っています

能満寺の蘇鉄（吉田町片岡、能満寺）

根回り約4, 5 m・中央の高さ約 6 m、樹齢約1000年。「日本三大ソテツの一つといわる 代表的巨樹である。

寺伝によると平安時代の陰陽学者「安倍晴明」、中国から995年に持ち帰って植えたといわれている。

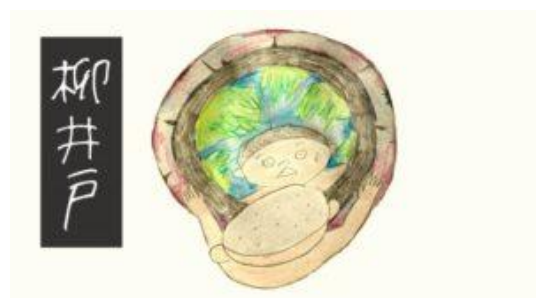
徳川家康が領地巡視の際、能満寺にて大ソテツの姿に感嘆、所望され、駿府城へ移植したところ、「能満寺へ帰りたいと夜ごと夜ごとに泣くため、哀れに思った家康は元に戻された。



柳井戸（浜松市北区引佐町井伊谷）

井伊谷（現北区引佐町 井伊谷）に兵藤宗十所有の井戸がありました。直径3尺（約90cm）の円形で、地下6尺（約1.8m）ばかりのところに水がある。昔、この付近には柳の木など無かったが、この井戸をのぞくと水底に柳の影が映っていることがあり、「井戸の水面に柳が映ると、崇られる」という言い伝えがあります。遠州七不思議の一つに数えられている。

現在、柳井戸があった場所は区画整理され、井戸はなくなっており標識など場所を確認できる表示も無いそうです。場所は県道303号線宮寺交差点の近隣とのことです。



参考文献

東海道と伝説（静岡新聞社）
静岡県伝説巡り（御手洗清）
遠州七不思議の旅（加藤鎮毅）
大須賀町誌
郷土の史話と伝説（松本俊男）
よもやま話（大須賀町おもと学級）
遠江古蹟圖繪（藤長庚）
安倍晴明巡歴千年記念（大石源三郎）
郷里雑記（八木美穂）
晴明塚（石野茂子）